

## 「人」という字は

志津小学校長 辻 太一郎

ある日の、ある低学年教室でのエピソードです。その日は、声の小さな女の子が日直でした。日直は、朝の会や帰りの会でみんなの前に出て、司会進行をしたり、みんなに指示を出したりしなければなりません。一方、子どもたちは友だちの声が小さいと「聞こえません」「もう一度言ってください」と、よく言います。（決して意地悪ではなく）ところが、その小さな声の女の子がなんとか日直の仕事をやり終えると、学級の子どもたちは「いつもより声が出ていたよ!」「一人でがんばったね!」と拍手を送りました。女の子もうれしそうな、満足そうな顔でした。

この学級の子どもたちは、声が小さいことをその子のマイナス面ではなくその子の個性と受け止め、結果ではなくその子の頑張りを認め、称賛しました。この女の子も、今回は安心感と自信をもって、さらに頑張ることができるはずです。お互いを認め合い、励まし合いながら、お互いが成長できる関係性が、本当に素晴らしいと思います。

そういう私も日々、子どもたちに励まされ、支えられている人間のひとりです。雨の日の昼休み、私は「子ども放送相談室」で子どもたちの質問に校内放送を使って答えています。その日も雨だったので、たまたま会議などが重なり、放送ができませんでした。下校の際、数人の子どもたちが、「今日は、なんで放送がなかったのですか。校長先生の疲労がたまっていたせいで、できなかったのかと心配しました。」別の子ども、「土日はゆっくり休んでください」と言ってくれました。別の日の放送では、質問をくれた子の名前を、私が間違えて読んでしまいました。（名字と名前がくっついてしまったような言い間違い）その日の帰りに本人に謝りましたが、その子は「校長先生はもともと英語の先生で英語ぺらぺらだから、ぺらぺらすぎて僕の名字と名前がくっついてしまったのですよね。」（決して私は英語ぺらぺらではありませんが）と、大人でも思いつかないようなすごいフォローをしてくれました。人を責める前に人を気遣う優しさ、失敗を許す寛容さ、機知に富んだフォロー。どれをとっても小学生の域をはるかに超えていると感心しました。「子どもは親の鏡」と言います。子どもたちのこのような姿も、日ごろの保護者の皆様の姿の写し鏡です。そのことに心より敬意を表したいと思います。

恐らく日本でもっとも有名な教員のひとりである坂本金八氏はこう言っていました。「『人』という字は、ひとりの『人』がもうひとりの『人』を支えている姿です。つまり、人と人が支え合うから人なのです。人は人によって支えられ、人の間で人間として磨かれていくのです。」ドラマの中のセリフとは言え、今回ご紹介したエピソードに照らし合わせると、まさに言い得て妙です。

さて、こうして互いに支え合い、磨き合ってきた4か月も終わり、もう夏休みです。夏休み中は、人との関係性の形も、学校でのそれとは違ってくると思います。その中で、新たな「支え」や「磨き」を体験し、さらに成長した子どもたちに9月に会えることを楽しみにしています。